22世紀のアダム・スミス

――資本主義と市場社会――

杉　江　雅　彦

Ⅰ　序章
Ⅱ　アダム・スミスの世界
Ⅲ　資本主義から社会主義思想へ
Ⅳ　スミスのダイナミズム
Ⅴ　資本主義と市場社会の行方

Ⅰ　序　　章

本篇は18世紀後半のアダム・スミスから始め，22世紀のアダム・スミスで終る予定である。スミスは経済学(思想)の始祖とされており，主著のひとつである『国富論』は初版の刊行(1776年)から現在に至るまで，経済学書としてはずば抜けて引用回数が多い名著として評価されてきた。また，『国富論』より17年前(1759年)に出版された『道徳感情論』も，同じく名著として有名である。この著作については，すぐあとで触れることになる。

さて，アダム・スミスが『国富論』で展開した世界観は，その後19世紀に入ってリカード，マルクス，エンゲルスなどによる資本主義論の盛化に繋がり，資本主義のアンチテーゼとしての社会主義の誕生を招いた。それが後にソヴィエト連邦や中国の共産主義化となって，第2次世界大戦終結後には東西両陣営が睨み合う冷戦状態を招いたことはよく知られているところだ。

しかし，1991年にソ連邦が崩壊して冷戦状態から解放されてからは，逆に急速なグローバリゼーションが進行するなかで，世界的に大不平等化が出来(しゅったい)し資本主義の歪みを露呈するに至った。アダム・スミスが構想した市場社会（商業社会）にも大きな変化が生じているといえよう。

筆者は資本主義と市場社会(経済)とは同義語でないと信じているが，経済学者のなかには資本主義イコール市場社会(経済)と思い込んでいる向きも少なくない。たとえば，グローバリゼーション下の大不平等化について，統計結果を元に検証したブランコ・ミラノヴィッチは，『資本主義だけ残った』という著書のなかで，現在の中国も資本主義国だと断じている[1]。このテーマは，Ⅳの3で改めて取り上げる。

1　Branko Milanovic, *Capitalism, Alone-the future of the System That Rules the World,* 2019［西川美樹訳『資 ↗

1990年代以降急速に進んだ世界的規模のグローバリゼーションが惹き起こした深刻な不平等，格差拡大に起因する資本主義の揺らぎのなかで，新しい資本主義あるいは資本主義以外の思想や制度を模索する動きも高まってきた。更に市場社会の行方に関しても，資本主義と同時に－もしくは別個に議論していく必要があろう。これらの点を中心に本篇を展開していきたい。

Ⅱ　アダム・スミスの世界

1　アダム・スミスの夕食を作ったのは誰か？

アダム・スミスは，1723年にスコットランドのカーコディという町で誕生した。しかし同じアダムという名の父親は，息子のアダムが生れる半年前に病気で他界していた。両親とも上流階級つまり小地主層の出身だったが，寡婦になった母親のマーガレットは再婚せず，ひたすら息子のアダムの養育に専念した。またアダムも生涯独身を通したので，母親が90歳近くで亡くなるまで，ほとんど一緒に暮した。アダムにとって母親は生涯で最も大切な人であった。

ところが，である。最近になってとんでもない本が現れた。それは『アダム・スミスの夕食を作ったのは誰か？』という，スウェーデンの大手新聞の記者で，現在はイギリスで活躍しているカトリーン・マルサルの執筆によるものだ。

マルサルはこの本で，経済や経済学から女性が締め出されていることを痛烈に批判しているが，その第1章が書名になっている「アダム・スミスの夕食を作ったのは誰か？」である。そのなかのポイントのひとつをマルサルの文章から抜き出してみよう。

> 「アダム・スミスは夕食のテーブルで，肉屋やパン屋の善意のことは考えなかった。取引は彼らの利益になるのだから，善意の入り込む余地はない。自分が食事にありつけるのは，人々の利己心のおかげだ。いや，本当にそうだろうか。ちなみにそのステーキ，誰が焼いたんですか[2]？」

確かにアダム・スミスも『国富論』のなかで，こう言っている。

> 「夕食に対する我々の期待は，肉屋，ビール醸造業者，あるいはパン屋の好意にではなく，自己愛に対して訴えかけているのであって，説いて聞かせるのは我々の窮

↘　本主義だけ残った－世界を制するシステムの未来』2021年，みすず書房］

2　Katrine Marçal, *Who Cooked Adam Smith's Dinner?—A Story About Women and Economics,* 2015.［高橋璃子訳『アダム・スミスの夕食を作ったのは誰か？』2021年，河出書房新社］（邦訳　26ページ）。

状ではなく，彼らの利益である[3]」

アダム・スミスは利己心，自己愛を悪徳だとは捉えていない。人の行動とくに交換については，自分の利己心とともに他人の利己心も認め合うことが重要だ，と言っていると理解すべきであろう。だからこそ，パン屋は客に喜んで買ってもらえる旨いパンを焼こうとし，肉屋はステーキに適した肉を売ろうと腐心するのである。

ここで再びマルサルの話に戻すと，スミスに「そのステーキ，誰が焼いたんですか？」と攻撃したのは何故か。恐らく書斎で思考や執筆に明け暮れていたスミスには，母親が焼いたに違いないステーキのことなど念頭になかった。母親や同居していた従姉妹のジャネットの夕食作りや家計の遣り繰りも，まったく気に留めていなかったであろう。

もちろんマルサルは，スミスの家庭に託（かこ）つけて，家族労働が経済活動として表には出ることなく，たとえば国民所得統計（GDP など）にも現れないことに抗議したかったのであろう。これは 18 世紀のスミスの時代だけの話ではなく，現代社会でもまかり通っているジェンダーの大きな課題である。

もし，いまアダム・スミスがマルサルの本を読んだとしたら，どのような反応を示すであろうか。慌てて『国富論』を書き替えたりするのか，それとも 18 世紀には家族労働の経済性など話題にもならなかった，と嘯くだろうか。

2　共感と公平な観察者

すでに述べたように，アダム・スミスの主著は『国富論』と『道徳感情論』である。両書の領域が異なるために内容が違っているのは当然であるが，この両書には近似性や共通点も少なくない。スミスは『国富論』において，人の経済活動の目的が利益の追及にあることを強調はするが，それには自制心，義務感，公正・正義といった制約が伴うべきであることを，『道徳感情論』できびしく表現していることに気付かされる。

そこで今節では，先ず『道徳感情論』でとくに強調されている内容を取り上げることにしたい。但し筆者はアダム・スミスの研究者ではないため，その道の専門家である水田洋，堂目卓生の知識を借りることを予め断わっておく。

先ず，『道徳感情論』の冒頭で語られている共感（シンパシー）から入ることにしよう。

「いかに利己的であるように見えようと，人間の本性のなかには，他人の運命に関心を持ち他人の幸福をかけがえのないものにする，いくつかの推進力が含まれてい

3　Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations,* 1776.［高哲男訳『国富論－国民の富の性質と原因に関する研究』（上下）2020 年，講談社］（邦訳　上巻 46 ページ）。

る。人間がそれから受け取るものは，それを眺めることによって得られる喜びの他に何もない。哀れみや同情がこの種のもので，他人の苦悩を目の当たりにし，事態をくっきりと認識したときに感じる情動に他ならない[4]」（第１部第１篇第１章）

ここでスミスが言いたかったのは，人間の本性のなかには他人の喜びや悲しみを感じ取り，その行為を是とするか非とするかを見極める力があるということである。そしてそれは，他人から見ても同様である筈だ。つまり，自分と他人とは互いに感情や行為について共感し合えるのである。そこで人間は，公平で中立的な観察者になり得る。しかしそれは，あくまで「胸中の公平な観察者」でなければならない。

続けてスミスは，その「胸中の公平な観察者」は常に賢明さによって自己規制し，行動を是認もしくは否認するとは限らない，と考えた。時には公平な観察ができず，行動の是認，否認を判断できない場合も有り得るに違いない。スミスはそれを自己欺瞞と呼んだが，それを矯正するための方策として，心のなかに一般規制を形成する対策を取り入れるべきであると教える。

その点に関しては「一般規制には二種類あって，第１は胸中の公平な観察者が，非難に値すると判断するであろうすべての行為を回避すること，第２は反対に胸中の公平な観察者が，称賛に値すると判断するであろうすべての行為は推進しなければならない」という堂目の解説でよく理解することができる[5]。これを水田流に表現すれば，「冷静な世間の目」ということになろう[6]。

もっとも，スミスは人間には賢い人と弱い人がある。言い換えると，人には「賢さ」と「弱さ」が同居していると考えた。「賢さ」は胸中の公平な観察者を称賛し非難を避けるが，反対に「弱さ」は公平な観察者よりも世間の評判を重視しようとする。一般規制はそれを重視してスミスが設けた叡知の産物ではないか。人は，この一般規制を守る義務の感覚を醸成しなければならない。

「賢さ」と「弱さ」に関連して，もうひとつ重要なスミスの主張にも触れておく必要がある。それは，弱い人は財産がなければ努力して－時には犯罪を犯してでも－それを獲得しようとする野心があり，それが経済を発展させる原動力にもなり得るという，物騒な考え方である。それに関連したスミスの，次のような意見もあることに注目したい。

「我々の望みは，高い社会的地位に就くこと，尊敬されることの両方にある（中略）

4　Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*,（6th ed.）, 1790［高哲男訳『道徳感情論』第６版，2013年，講談社］（邦訳　30ページ）。
5　堂目卓生『アダム・スミス－『道徳感情論』と『国富論』の世界』2008年，中央公論社，56ページ。
6　水田洋『アダム・スミス－自由主義とは何か』1997年，講談社，65ページ。

人間の尊敬に値すること，それを獲得すること，更にそれを享受することが，功名心と競争心の大きな目的である。それほど望ましい目的の達成に等しく通じる二つの異なった道が，我々に提示されている。一方は，学問の研究と徳の実践を通じたものであり，他方は，富裕と高い地位の獲得を通じたものである（第 1 部第 1 篇第 3 章）[7]」

このような徳の道と富裕の道のいずれを弱い人はえらぶであろうか。大方の人間には「賢さ」と「弱さ」の二面があるのだから，徳への道と富裕への道を同時にえらぼうとするであろうが，結局は虚栄心と欲望に負けて，富裕への道をえらぶことになろう。しかしスミスは，この「弱さ」が持つ野心が経済を進歩させる原動力になる，と強調したのである。

このスミスのアイデアに関連してしばしば引き合いに出されるのが，1705 年以降順次に出版されたバーナード・マンデヴィルによる奇書『蜂の寓話』である。その初めに出てくる風刺詩は，蜂たちの悪徳ぶりを描いたあと，彼らが急におとなしくなったら，蜂の世界が衰退してしまったという寓話である。

蜂たちはもともと，悪徳に満ちた集団であったが，贅沢三昧に暮していた。欺瞞や貪欲が渦巻いていたが，どの蜂も食いっ放れはしていなかった。ところがある日，哲学者の忠告を受け容れた蜂たちは，これまでの生活を恥じて品行方正に暮すようになったのだ。しかし，意図せざる変化が起きたのである。蜂たちが正直で高潔になったとたんから，神に懺悔することがなくなったため，司祭に来てもらう必要がなくなり，泥棒もいなくなって監獄の番人の仕事も失われた[8]。

そこでマンデヴィルは，この本の副題を「私悪は公益（privatevices, public benefits）」と名付けたのである。マンデヴィルはこの著書で，人間は有徳よりも悪徳こそが社会を適合させるという理屈を，持ち前の雄弁さで，しかも執拗に説いたのだ。

経済学的には，アダム・スミスの「自愛心が社会の利益に一致する」との主張を先取りしているが，マンデヴィルが挑発しようとした対象は，主に説教壇の上から見下げるように，役にも立たない現実離れした（マンデヴィルの言）教義を振り回す，道徳哲学者や聖職者だったと思われる。「マンデヴィルにはどこか悪魔的なところがあった」とは，『じゅうぶん豊かで，貧しい社会』の著者であるスキデルスキー父子の批評である[9]。

自らも道徳哲学者だったスミスは『蜂の寓話』を読んで，マンデヴィルの「私悪は公

7　Smith，前掲書『道徳感情論』（邦訳　122-3 ページ）。

8　Ulrike Hermann, *Kein Kapitalismus ist Auch Keine Lösung,* 2016.［鈴木直訳『スミス・マルクス・ケインズ－よみがえる危機の処方箋』2020 年，みすず書房］（邦訳　56-7 ページに負っている）。

9　Robert Skidelsky and Edward Skidelsky, *How Much is Enough?—Money and Good Life,* 2012.［村井章子訳『じゅうぶん豊かで，貧しい社会－理念なき資本主義の末路』2022 年，筑摩書房］（邦訳　87 ページ）。

益」という主旨には基本的に同調したものの，その論調には憤慨したようで，半世紀も昔の発想だとはいえ，このまま黙って見過すことはできなかったようだ。

そこでスミスは，『道徳感情論』のなかで『道徳感情論』ならぬ『道徳攻撃論』というべき激しさで，マンデヴィルを批判している。スミスとマンデヴィルの関係にくわしい研究者の間でも，あまり取り上げていないようなので，冗漫になる恐れはあるがここでつけ加えておきたい。スミスは『道徳感情論』の「勝手気ままな体系について」というタイトルが付けられた章で，マンデヴィルのことを次のように批判している。

> 「この著者（マンデヴィルのこと）の見解は，ほとんどすべて間違っているが，人間の本性には幾通りかの風貌があって，特定の方法で眺めた場合，それは眺めただけで気に入ってしまいそうなものもある。生き生きとして滑稽だが，しかし荒っぽくて粗野なマンデヴィル博士の雄弁によるとはいえ，そのようなことは，未練な人びとがきわめてつけ込まれやすい真実味と，何となくありそうな雰囲気を，彼の学説に付与してきた」

スミスのマンデヴィル攻撃はこれだけでは済まず，更にエスカレートする。

> 「マンデヴィル博士の著書の大きな誤りは，あらゆる激情，全体として不道徳なもの－程度や方向を問うことなく－を想像させたことにある。こうして彼は，すべての事柄を他人の感情であるか，または感情であるべきものと何らかの関連性を有する虚栄心，として論じる。だから彼が，お好みの結論，つまり私的な不道徳（悪徳）は公共の利益であると認めさせるのは，この詭弁を駆使してのことである（いずれも第７部第１篇第４章[10]）」

このほかにも，まだまだスミスのマンデヴィル攻撃は続く。スミスの著作の中の文章としては，筆者の知るかぎり，最も感情的で激越な個所が多いことに驚かざるをえない。恐らくマンデヴィルの文言は，よほどスミスの神経を逆撫でしたに相違ない。

3　市場社会の発見と構図

ここからは，アダム・スミスの政治経済学の根幹である，市場社会の発見と構図に関するスミスの功績を中心に進めていきたい。スミスの『国富論』の原題が，「諸国民の富の性質と起因についての探求」となっていて，スミスは母国のイギリスだけでなく，

10　Smith，前掲書『道徳感情論』（邦訳　568-577ページ）。

極端にいえばあらゆる国に適用可能な課題と，その解決方法を提示しようとした。

そのなかで最も重要なテーマのひとつが，重商主義に対する批判であった。しかし本篇は『国富論』の詳しい解説ではなく，スミスのもうひとつの大きなテーマである市場社会の構図を手掛かりに，資本主義と市場経済の発展の過程を辿り，その構造と機能に迫ることを主眼としているため，ここでは，スミスの重商主義批判に関しては次のように簡単な説明に留めておく。

重商主義というのは，とくに国家や商人が国内市場での取引や外国貿易において，金や銀などの金属貨幣（地金も含む）を獲得し，蓄積することが豊かさの増進になると錯覚して，できるだけ輸出をふやそうとする一方，輸入は抑制して輸入品には高い関税を課す，という政策が採られていたことを指している。しかしスミスは，逆に自由貿易を推進して関税は下げるという国家政策を掲げていた。

アダム・スミスは重商主義者とは違い，国民の富を生み出す最大の原資は労働によるという発想から出発している。したがって，労働生産性を高めることこそ国民の豊かさに直結すると考えていた。そこでは，分業が極めて重要な出発点になっているというのである。しかも，その分業が何に起因しているのかといえば，それが交換である。

スミスによれば，人間には交換性向があるという。人は自分ひとりで何でも生産することはできない。そこで，自分の生産物と他人の生産物を交換したいという性向が働くことになる。もっとも，他人との生産物の交換は愛情を持って行う場合もあれば，そうでない場合もあるに違いない。また，何処へ行けば自分の欲しい物と交換する相手を見付けることができるのかわからないこともあろう。そこで必要になるのが生産物の交換の場，すなわち市場の存在である。

スミスは，分業が行われるための前提条件になるのが市場であると考えた。但し，それにはいくつか条件がある。先ず，市場はフェア（公正）でなければならない。独占的な参加者は排除すべきであり，市場参加者のフリー（自由）な売買が保障される必要がある。

更に必要な市場の条件として，市場参加者は利己心，自己愛を持っていなければならない，とスミスは強調する。これは少しわかりにくく，市場参加者の条件としては矛盾しているようにも思われるが，たとえば市場で需要が過剰な場合，買手は買い損ないを避けるために，自分が許容できる範囲で高い価格を受け入れなければなるまい。

反対に，供給過剰で価格が下がれば，売手は低い価格で売らざるを得ない。これら市場参加者の決心は利己心や自己愛に基づくものだ，とスミスは考えたのである。スミスは『国富論』のなかで，次のように言っている。

「分業，つまり労働の細分化によって，同数の人々が遂行しうる産業活動は飛躍的

に増加するが，これは三つの異なった副次的原因に基づいている。すなわち第1に，労働者一人一人の技量の向上，第2に，ある種類の仕事から他の仕事に移る際に一般的に失われる時間の節約，そして最後に，以前は多数の人間が遂行していたものを，労働の促進と短縮により一人で遂行可能にするような無数の機械の発明，これである[11]」（第1編第1章）

更にスミスは，分業が確立すると社会全体が商業社会（市場社会と殆んど同義語）に成長するとも喝破するのである。

「一旦分業が確立すると，自分自身の労働によって入手できる生産物は，自分にとって必要なもののごとく一部になってしまう。人は労働による生産物のうちの自己消費を上回る余剰部分を，彼が利用しうる他人労働の生産物と交換して，必要なものの大部分を補充し始める。こうして誰もが交換によって生活する。つまり，ある程度商人になり，社会全体も，間違いなく商業社会と呼びうるものに成長するのである[12]」（第1編第4章）

確かに，「『国富論』が経済学の不朽の古典であるのは，市場が社会システムを成しているのを発見し，その成立ちについて深い洞察を示したものであるからだ」との間宮陽介の評価は，まさに正鵠を射ているといえよう[13]。

市場社会（商業社会）は開かれたフリーでフェア，しかも正義心に支えられた公平・公正な交換の場でなければなるまい。しかしそれに対応する市場参加者は，利己心や自己愛を持って市場に参加する，とスミスは主張するのである。この間の矛盾をどう説明するのか。スミスの主張は次のようなものだ。

すべての個人は利己心と自己愛で労働し市場参加者となるが，それが必然的に社会の年々の収入を可能なかぎり最大にする。もちろん個々人は公共の利益を促進しようと意図しているわけではないし，それをどの程度促進するかを知っているわけでもない。自分自身の利益だけを意図しているが，彼がこうするなかで，他の場合と同じように「見えざる手」に導かれて，彼の意図にまったく含まれていなかった目的を促進することになる。つまり，社会的利益は個人の利益の総和である，とスミスは言いたかったのであろう。それはすでに述べたマンデヴィルの「私悪は公益」と共鳴している，と言わざるをえない。

11　Smith，前掲書『国富論』（邦訳　上巻36-7ページ）。
12　同書（邦訳　56ページ）。
13　間宮陽介『市場社会の思想史－「自由をどう解釈するか」』1999年，中央公論社，4ページ。

Ⅲ　資本主義から社会主義思想へ

1　労働者の窮乏化を予感したリカード

アダム・スミスは，市場社会の階級を地主, 資本家（親方）, 労働者の三種類に分け，それらを同列に並べた。このうち地主は，土地は所有するが労働はしない。しかし，地代という不生産収入が入る。

資本家－まだスミスの時代は明確な資本家の概念が確立していなかったため，独立生産者とか親方といった用語が使われていた－は，生産から得た収入のなかから，土地を借りた地主に地代を払い，雇った労働者に賃金を払った残りが利潤となった。

労働者は，自分の労働力以外には何も持たないため，地主や資本家に雇われて賃金を得る他に道はなかった。

しかしスミスには，階級間の格差という意識は無く，これら三つの階級間にあるのは職能の違いだけであった。その意味では，スミスはウィンウィンの理想主義者だったのである。

しかし，『国富論』から 41 年後の 1817 年に，デヴィット・リカードが著した『経済学および課税の原理』では，スミスのような楽観主義は影を潜め，逆に悲観論の色が濃い。リカードの関心は，なぜ資本家は裕福で労働者は貧乏なのか，また，全生産物は地代, 利潤, 賃金が三階級でどのように分配されるのか，更に元を質せばこの三者の間で分配される富はどこから生み出されるのか，という問題にあった。

そこで，かってスミスを途方に暮れさせた，商品の交換価値はどこから，どのように発生するのかについて，リカードも同じ疑問で考えをめぐらせた。リカードはスミスが結局は未解決のまま後世に残した,「ある財の交換価値は，それを生産するのに要した労働量によってのみ決まる」という説を採用したのだ。

とすれば，労働者の労働によって生れた富をいかに分配するかが問題にならざるをえない。比喩的にいうなら，あたかも一定の大きさのパイを階級間で分配するようなもので，ある階級がより多く取れば，他の階級の分け前はその分だけ減少する理屈になる。これでは三階級間の対立が起こるのは避けられまい。

先ず，地主と他の二階級との利害は相反する。何故なら，穀物価格の値上がりは収入の引き上げになるが，労働者の賃金がそれに比例して上がるわけではない。しかし多少は上がる可能性はある。しかし資本家には関係ない。

それでは，資本家と労働者の間はどうか。これには二つのケースが考えられよう。一つは，穀物と製造物が同一の価格を保つ場合である。その際は，資本家の利潤は賃金が高いか低いかに反比例して，高いか低いかになるであろう。しかし，穀物価格がそれを

生産するための労働量が増えて騰貴するような事態になれば，労働者の賃金は上がるが資本家の利潤は必然的に低下する。

こうして，利潤と賃金は一方が増加すれば他方は低下するという関係になり，資本家階級と労働者階級は分配をめぐって対立関係に陥ることは避けられまい。リカードの所説は，スミスのような発展の観点からではなく，分配をめぐる争いという視点で捉えられている，といってよかろう[14]。

この場合，圧倒的に有利なのは労働者を雇用する権利を持つ資本家であり，自分の労働しか売ることのできない労働者は窮乏を強いられることになる。しかしリカードの結論では，「もし，労働者だけが社会的富を生み出しているのであれば，一体，利潤はどこからやってくるのか。もしそうなら，資本家はまったく無用の長物であり，労働者を搾取しているというだけの理由で利潤をあげている」ということになる[15]。

リカードの生い立ちは，スミスのような生来の学者ではなかった。リカード一族はポルトガル系のユダヤ人であり，証券業務を営んでいた。父親のエイブラハムは一族の事業を拡大するためロンドンに派遣され，リカードもロンドンで生れた。極度に信心深かった父親が，リカードに高等教育を受けることを許さず，そのためリカードは学校には数年しか行っておらず，あとはすべて独学だった。

早くから，父親について証券ブローカーとして勤めていたが，リカードがクウェーカー教徒の女性と結婚したことに怒った父親は，息子を勘当してしまった。そこでリカードは，友人たちから資金を借り，自分の事務所を開いて，証券ブローカーとして大成功を収めたのである。とくに，ナポレオンとの戦争でワーテルローの戦いに，イギリスの勝利を賭けてイギリス政府の軍事公債に出資し，大成功を収めたという。

リカードはそれを機に証券取引から身を引き，資産を土地に投資して晩年を経済学に捧げた。実務家から学者への大転進である。それ以前の 1799 年に，リカードは保養地の貸本屋でアダム・スミスの『国富論』を偶然手にしたことが，彼の人生にとって転機の始まりであった。

リカードは経済学に興味を惹かれ，『国富論』を隅から隅まで何回も繰り返して読んだという[16]。何年間も苦労してまとめあげたリカードの『経済学および課税の原理』の労作が，スミスからマルクスへと進む資本主義研究の橋渡し役となったのである。

2　エンゲルスの科学的社会主義

ここから暫くは，マルクスではなくエンゲルスを登場させよう。エンゲルスはマルク

14　同書　21-2 ページ。
15　Hermann，前掲書（邦訳　90 ページ）。
16　同書（邦訳　85 ページ）。

スの補助者か助言者のように見られてきたが，実はそうではなく，もっと重要な役割を果たしているのである。スミスとリカードの自由主義的経済理論を結びつけて考えた最初の学者は，マルクスではなくエンゲルスであった。またエンゲルスはマルクスより前に，古典的－マルクス的とは違う意味で－弁証法的にアダム・スミスの理論の核心的部分である，競争を批判しているのだ。

その出発点であるテーゼは競争と独占であるが，そこから出てくるアンチテーゼは独占と私有財産の否定だった。更にエンゲルスは，私有財産の否定によって競争と独占の両方を崩すというジンテージを導き出したのである。彼はすでに社会主義者ではなく，共産主義革命家になっていたといってよかろう。

その頃のエンゲルスは，もっぱら空想的社会主義の批判に熱心だった。「初期の社会主義者のなかには，現実の資本主義社会から目を遥か彼方に向け，理想の社会を建設しようと夢みた人たちがいた。ロバート・オーエン，フーリエ，サンーシモンといった人たちである」と間宮も言った通り[17]，彼らは現実の社会を人間の本性に反するとして批判し，その代りに，計画された理想の社会を建設することを志向したのである。

エンゲルスは，これらの主張は資本主義社会の分析・批判もせずに，夢を追いかけているだけの空想的社会主義と名付けて，きびしく批判した。これに対してエンゲルスの接近法では，資本主義自体の批判的分析をすべきであると主張した。このためエンゲルスの社会主義は科学的社会主義と呼ばれた。

このあとの 5 でも述べるが，1842 年から 44 年にかけて，エンゲルスはマンチェスターにある父の姉妹会社に派遣された。其処での勤務の間を割いて書き上げたのが，後にマルクスを絶賛させた『国民経済学批判大綱』である。短い論文ではあったが，哲学者でもあるエンゲルスは，私有財産を否定するテーマを中心に，もっぱらヘーゲルの弁証法でこれを仕上げた－弁証法については次節で説明を加える。

そのテーゼであるアダム・スミスの競争と独占の戦いに続き，アンチテーゼは私有財産の正当性否定になり，当然ながら私有財産の廃止によって競争と独占を克服するというジンテーゼに導いていくのである。

1844 年の夏，エンゲルスはマンチェスターの勤務を終えてバルメンへの帰途，パリまで足を伸ばしてマルクスを訪ねた。互いに意気投合した二人は，十日間続けてパリの酒場を飲み回り，その十日間で生涯続く友情を作り上げたのだ。

1847 年になって，マルクスとエンゲルスは「義人同盟」に加入した。程なくこの組織は「共産主義者同盟」と改称されたが，肝心の綱領が欠けていた。その起草を委嘱されたマルクスは，エンゲルスの草案を参考にしながら短期間で書き上げた。その書き出しは，「ヨーロッパに幽霊が出る－共産主義という幽霊である」というセンセーショナ

17　間宮，前掲書　26-7 ページ。

ルな文章で，また最後は「万国のプロレタリア団結せよ」の檄で締めている[18]。全体として歯切れのよい簡潔なプロパガンダといえよう。

しかも，全体が弁証法的な構成になっているのも，大きな特徴だといってよかろう。先ずテーゼはブルジョアジーの台頭である。しかし，それは財産を少数派の手許に集積させる。次いで，アンチテーゼではブルジョアジーの没落が予告される。宣言では，ブルジョアジーは何よりも自分たちの墓掘り人夫を探している，と決めつける。最後にジンテーゼが来る。それが共産主義社会の到来であり，私有財産の廃止も謳われているのだ。

3　弁証法的唯物論とマルクス

今節では，後にマルクス主義と呼ばれるようになったマルクスの思考法，すなわち弁証法的唯物論の基本から話を進めたい。もっとも，筆者には弁証法的唯物論の知識が不足しているため，マルクス主義の名解説者であるアンリ・ルフェーブルの助けを借りることにする[19]。

ルフェーブルによると，認識を進めるための議論や努力はすべて，味方と敵（テーゼ），然りと否（アンチテーゼ），主張と批判（ジンテーゼ）という，相反するテーゼの対決によって行われる。ところが，この理論は十分ではなく，二つの重要な点を明らかにしていない。その第１は，お互いに対立し合っているテーゼは相異なっているか，あるいは一致していないだけでなく，相反しており，往々にして矛盾してもいる。

第２に重要なことは，哲学者もあらゆる人間存在と同様に，すべてが矛盾を含んでいる既得の知識と対決しながら，真理を求めて模索し，一歩ずつ前進することを余儀なくされているのである。つまり人間の思惟における矛盾は，本質的な問題を提起しているといえよう。

矛盾が提起したこの重要な問題に直面して，知性と理性が取れる態度は二つある，とルフェーブルは主張する。その一つは「すべての矛盾をひとからげにして投げ捨てること」，また他の一つは「人間的思惟が矛盾を通じて真理を探究することと，矛盾が客観的意味を持ち，現実的なもののなかに基礎を持っていることも，同時に認めること」である。むしろ，矛盾とその客観的基礎の探求を関心の中心に据えることこそ弁証法的理性だ，と言い切ってもいる。

マルクスがはじめて，この弁証法的方法を一貫した形で取り上げたのである。マルクスは，「研究される諸現象の法則をあばき出すこと，つまり現象の諸要素の或る与えら

18　Karl Marx, Friedrich Engels, *Das Kommunistische Manifest,* 1848.［大内兵衛・向坂逸郎訳『共産党宣言』1951 年，岩波書店］（邦訳　37, 87 ページ）。

19　Henri Lefebvre, *Le Marxism,* 1966.［竹内良和訳『マルクス主義（改訳版）』白水社，1968 年］（邦訳　31-45 ページ）。

れた瞬間における関係のみならず，それら要素の諸変化とその進化との法則をあばき出すことでもある」と述べている。更にマルクスは，研究の方法と叙述の方法とは区別した方がよい，研究(分析)の後に叙述がくることも主張しているのである。

かなり表現が抽象的で難しいが，マルクスの主な主張を整理して列挙すると，①分析によって達せられ，総合的叙述によって再構成されるべき現実は，いつでも運動している現実である。②現実を十分深く分析すれば，矛盾する諸要素（たとえばブルジョアジーとプロレタリア），肯定(ポジティブ)と否定(ネガティブ)に達することができる。③研究される対象の固有な法則(すなわちその生成)を探し当てるべきだ，などに集約されよう。このような弁証法的方法は，後にマルクス主義的方法とも呼ばれるようになった。

4 『資本論』の世界を推考する

マルクスの『資本論』は難解で読みにくい。マルクス本人も，同書の初版への序章で，「すべてはじめはむずかしいということは，どの科学にも当てはまる。とくに第1章の理解はもっとも困難であろう」と認めているのだ。かといって，読み進んでいるうちに平易で読みやすくなる，というものでもない。だから誰もが途中で挫折する。

ここで筆者が『資本論』を解説することは到底できないし，また本論文もその目的を持ってはいない。アダム・スミスの市場発見から始めて，資本主義と市場社会の行方を探るのが目的であるが，かといって，その史的発展の経過を追いながらマルクスの『資本論』を避けて通ることはできない。そこで今節では，重要なマルクスの主張を推考するというか，展望しておくことにしたいと思う。

マルクスは1843年にパリで，経済学を中心とした研究を始めて以降，スミスとリカードの著作を繰り返し読んだといわれるが，とくにリカードの次のようなテーゼを継承した。労働だけが価値を作り出す，社会は敵対する階級から成り立っている，労働者は窮乏化せざるをえない，資本家は自分が生産してはいない価値を取得している，がそれである。

マルクスは，自ら作り上げた弁証法的唯物論を駆使して，それらのテーゼからアンチテーゼを，更にジンテーゼを引き出した。結論的には資本主義は崩壊に至るというのだが，その理論的根拠について二，三ここで推考しておこう。

先ずは，労働だけが価値を作り出すというテーゼである。マルクスもスミス，リカードと同様に，労働価値説を採用している。しかしマルクスは，スミスがとまどいリカードが見過した点を補強して，労働も他のすべての財と同様に商品であり，使用価値と交換価値を持っている，と考えた。

資本家は労働力を交換価格で購入する。つまり，労働者が家族ともども生活していく

のに必要な金額の賃金を払わなければならないが，マルクスは労働者の一日の労働時間を６時間と想定して計算した。しかし現実には，資本家は労働者をできる限り長時間働かせるため，実際の労働時間は労働者が生活するために必要な最低時間を超えることが常であった。この超過部分が資本家の利潤となる。いわゆる剰余価値と呼ばれた概念である。

こうして資本家が手に入れた剰余価値を資本に追加することを資本の蓄積というが，それは当然ながら，資本の蓄積をめぐって資本家の間で熾烈な競争が展開することになる。マルクスは，上に述べた資本の過程を次のような式で示している。すなわち，貨幣（G）が商品（W）を生産するために投資される。この商品を販売することにより，元の貨幣よりも多くの貨幣（G’）が生み出される。G−W−G’（＝G＋△G）（△G は貨幣の増加分）

この式が表現しているのは資本蓄積である。したがって資本家同志の競争が熾烈になることは必然であった。そのため資本家は，地主のように立派な邸宅を建てパーティに興じたり，パトロンとして芸術作品を買い集めたりせず，ひたすら資本の蓄積に専念し，自分たちの工場を拡張して新しい機械を購入することに没頭したのだ。

マルクスは更に考えを巡らす。資本家たちがこうした競争を続けると，中小企業はつぎつぎに潰され，最後には少数の大企業だけが生き残る。それでも，競争がもはや成り立たなくなるまで，企業を追い詰めていく。資本家たちは共食いを続け，やがて資本主義は滅んでいくに違いない。これが弁証法的にマルクスが行きついた結論だった。

しかし現実には，マルクスの予想が外れたことは周知の通りである。大企業の寡占状態は驚くほど安定的であった。一体，どこにマルクスの分析の誤謬があったのだろうか。マルクスは弁証法的史的唯物論を使い，理詰めで資本主義の運命を予想した。しかしマルクスの決定的な誤謬は，貨幣と信用という金融面での理解が，無かったとはいえないまでも，稀薄であったことは否めない。

つまりマルクスは，資本の蓄積を金と銀という金属貨幣で捉え，完全な金本位制を要求した。マルクスは信用理論を見過したのだ。スミスやリカードの労働価値説や剰余価値論に傾倒しすぎたのが，マルクスの足を掬った最大の原因ではなかったか，というのが筆者の推考である。

そうはいっても，マルクスの最大の功績は資本主義のダイナミズムを初めて正しく記述したことだった。更にマルクスの理論と思想は学界ばかりでなく，世界中の社会主義運動にもきわめて大きな影響を与えたことも否定できない事実である。[20]

20　Hermann，前掲書（邦訳　183-205 ページ），根井雅弘『経済学者はこう考えてきた－古典からのアプローチ』2018 年，平凡社　18-21 ページ。（この二書を参考にし，それぞれ一部を引用した）。

5　マルクスとエンゲルスの交友関係

マルクスとエンゲルスとはパリで初めて出会って意気投合し，二人の密接な交友関係はマルクスが亡くなるまで続いたことは，すでに述べた。二人は当初は革命家の同志として社会主義，共産主義への道を探り，後半はともに経済学者として資本主義批判の研究に明け暮れた。このような仲だったマルクスとエンゲルスだが，二人の出自や日常生活は掛け離れたものだったと思われる。

先ず出自が大きく異なっている。マルクスは 1818 年にプロイセンのトリーアで生れた。マルクスの父ハインリッヒは弁護士として評判も高く，トリーアの名士であった。マルクスは両親に大切に育てられ，ギムナジウムに通った後ボン大学で法律を学んだ。十八歳になって幼馴染みで四歳年上のイェニーと結婚した。二人はイェニーが亡くなるまで，仲良く暮した。もっともマルクスは定まった職に就いたことがなく，収入も少なくて不安定だったため，終始貧乏生活が続いた。そのわりにはブルジョア趣味だった。それを助けたのがエンゲルスだったが，その話題はこの後すぐに述べることになる。

一方のエンゲルスはというと，まるでマルクスとは正反対である。マルクスより二歳年下のエンゲルスは，繊維工場主であるフリードリヒ－息子のエンゲルスと同名－の長男として，ドイツ有数の産業都市バルメンで誕生している。

父親は，才能に恵まれた息子を早く自分が経営する工場に入れようとして，アビトゥア（高等学校卒業資格）を取らせないようにギムナジウムを中退させた。したがってエンゲルスは大学では学んでいない。－もっとも，ベルリンで一年間の兵役に就いている間に，エンゲルスはベルリン大学に潜り込んで，シェリングの哲学講義を聴講していたというから，タフな青年だったにちがいない。

エンゲルスは，兵役を終えた後，マンチェスターにある父の関係会社に勤めている間に知り合った，女工のメアリー・バーンズと，正式な結婚ではなかったものの，メアリーが亡くなるまで親密な関係を続けた。マルクスの生活スタイルがブルジョア風であったのとは大違いで，エンゲルスは労働者と仲間感覚でつき合っていたのである。

それでは，ここからはエンゲルスによるマルクス支援について，もっぱら金銭面に限って披露することにしよう。社会主義，共産主義の革命家たちを危険人物としてきびしく取り締まっていたプロイセン政府は，1849 年 5 月にマルクスをプロイセンから追放した。

そのためマルクスは，ヨーロッパ中を転々とせざるをえなくなったが，最終的にはイギリスに亡命し，ロンドンに住んだ。イギリスはヨーロッパで唯一，余裕をもって外国人の社会主義者たちを放置していたからであった。

しかし，プロイセンを追われ，収入の道の殆んどを閉されたマルクスは，ロンドンでも最も貧民街だったソーホーで，それこそ二間しかない狭い住居に親子六人が住むとい

う，悪条件に甘んじなければならなかったのだ。マルクスの住居の様子については，プロイセン政府の警察スパイのひとりが，ベルリンに送った報告書で明らかになっている。

いくらか誇張はあるだろうが，それによると，「ソーホーでのマルクスの住居は，居間と寝室が一部屋ずつあって，家のなかの家具はみな壊れかけ，引き裂かれている。居間の真ん中に置かれた馬鹿でかい机の上には，マルクスの草稿や書物，新聞が積み上げられ，子どものおもちゃや妻の縫い物の端切れ類が並んでいる。

その横には欠けたカップや汚れたスプーン，フォークなどが積み重なっている…しかし，こうしたことにマルクス夫妻は平然としていて，訪問者を親し気に迎え入れ，パイプや葉巻タバコを勧めてくれる。ウィットに富んだ会話もはずみ，この家族に親しみすら感じるようになる[21]」と書かれている。

絶えず，マルクス一家が住む近くに居を移して支援してきたエンゲルスも，この時ばかりは破産状態に近かった。エンゲルスの両親は，息子が革命家として生涯を送ろうとしていることを知って仰天し，息子への仕送りを止めてしまったからである。そこでエンゲルスとしては，マルクス一家の困窮ぶりを見て見ぬ振りをせざるをえなかった。

ところが，父の関係会社であるマンチェスター店の共同経営者が，不正な行動に走っていることを知った父親は，エンゲルスにマンチェスター店に戻ってもらい，エルメン（共同経営者）の行動をチェックしてほしい，との思いが強くなっていた。エンゲルスにしても，この際，一族の会社に戻らざるをえまいと覚悟を決めて，マンチェスターに戻ったのだ。其処でエンゲルスは高い経営手腕を発揮し，会社の利益向上に貢献した。

そういう訳で，収入が格段に増えたエンゲルスは，1860 年以降はマルクスに年間 350 ポンドの終身年金を約束することができたので，マルクスの晩年は気兼ねなく，もっぱら思索に集中することができるようになった。またエンゲルスも，マンチェスターの織物会社を共同経営者に売り渡して肩の荷を下ろし，マンチェスターからロンドンに越してきて，マルクスの住居から徒歩十分ほどのところで住むようになった。

もっともマルクスは，現代の診断では化膿性汗腺炎といわれる，こぶし大の腫瘍に侵されて，座ることも寝ることも容易でない難病に苦しめられていた。この病気の原因は煙草の吸い過ぎだといわれていたが，マルクスは極端な葉巻好きだったらしい。

マルクスの最晩年は，殆んど執筆活動ができないくらいに病状が悪化して，1883 年 3 月に亡くなった。それも毎日午後に続けていた挨拶にエンゲルスが訪れ，肘掛け椅子にもたれたままのマルクスを見つけたのである。

21　Hermann，前掲書（邦訳　155-6 ページ）。

Ⅳ　スミスのダイナミズム

1　『北京のアダム・スミス』

筆者が本論文のテーマを，アダム・スミスを起点とする資本主義と市場社会の行方にしようと決めた段階で，スミスの名がタイトルになっている最近出版された著書を 4 冊見付けた。そのうちの 1 冊は，すでにⅡで紹介したカトリーン・マルサルの『アダム・スミスの夕食を作ったのは誰か？』である。

2 冊目は少し古く－といっても 10 年前に日本語版が出版されたジョヴァンニ・アリギの大著『北京のアダム・スミス』である。この著作を今章の中心に据えたい。3 冊目のウルリケ・ヘルマン『スミス・マルクス・ケインズ』も，すでにⅡとⅢで何度か参考にした。更に最近発行されたジェシー・ノーマンの『アダム・スミス　共感の経済学』は，このあとⅤで登場する。どういう訳か，このところアダム・スミスに関する出版が流行しているように感じられる。

さて，これから登場する『北京のアダム・スミス』は，筆者にとっては奇異な感じがするタイトルだった。書店で現物を見ることなく注文してしまったが，届いた現物を見てびっくりした。なんと 600 ページを優に超える大著だったからである。

アリギの名は日本ではあまり知られていないが，世界システム論の分野においては，世界的に著名な社会学者である。筆者は学生時代に，古典派経済学とワルラスの一般均衡論を中心に学んだので，アリギが展開する，マルクス主義経済学による世界システム論の多様性を理解するのは，大変な苦労だったと告白せざるを得ない。

さてアリギは，『北京のアダム・スミス』の前著である『長い 20 世紀』のなかで，16 世紀以降におけるヘゲモニー国家の変化のサイクルを掲示しており，そこでは，「長い 20 世紀のアメリカにおいて巨大企業に体化された資本主義的権限が，その活動に必要な巨大な空間を，すでに内部に掌握した領土的権力と結びついて変換を成立させた，いわば資本の帝国的な国家によるヘゲモニーになった」と言っている[22]。

この文章は，アリギが資本主義の歴史を長期的見地で捉えると，投資の軸足が生産から非生産－とくに金融に移っていくと考えた証左であろう。資本主義の金融化は，生産への新投資が利潤を生まなくなった現状を写すもので，何らかの革新的イノヴェーションが起こらなければ，生産に対する投資は進まず，それは資本主義社会にとって蓄積の危機でもある。

22　Giovanni Arrighi, *The Long Twenties Century: Money, Power, and the Origins of Our Times,* 1944.［土佐弘之訳『長い 20 世紀－資本，権力そして現代の系譜』2009 年，作品社］。ここでは『北京のアダム・スミス－21 世紀の諸系譜』（日本語版）に併載されている，山下範久「資本主義から市場社会へ」に拠った（同書 598 ページ）。

そこでアリギは，新しいヘゲモニーを構成する資本主義的権力を持つのはどこか，に注目した。そこから生れてくる資本主義のあり方がどう変わるのか，という疑問も抱いた。さらにアリギは，新しいヘゲモニーがアメリカから東アジアに移ることを想定したのである。アリギはスミスのダイナミズムの起点を，遅くとも18世紀の中国に想定したものと思われる。その理由は，もっぱら市場の拡大によって経済は発展するという，スミスの発想に共感したからに相違ない。

アリギは，ウォンとポラメンツによる次のような主張に同意したものと思われる。ビン・ウォンは，「ヨーロッパと中国の軌道は，産業革命に先立つ数世紀の間，労働強化に支えられた大市場基盤の成長があった，というスミスのダイナミズムの一部分を，重要な特徴として共有していた」と主張した。

またケネス・ポラメンツも，「1789年になっても，西ヨーロッパの土地，労働，生産物の市場は(中略)およそ中国のほとんどの市場にくらべて，より完全競争から遠かった。つまり，多くの貿易パートナーのなかから自由に選ぶ機会に恵まれていない，多くの売手と買手から成っていた。したがって西ヨーロッパは，アダム・スミスによって構想されたプロセスに，中国ほどふさわしくはなかった」と共鳴する[23]。

そしてここからが，アリギが書名を『北京のアダム・スミス』と決めた直接の理由がわかる文章である。少し長くなるが，示唆に富む内容であるため省略せずに紹介しておく。

> 「これらの主張－ウォンとポラメンツのこと(筆者注)を合わせたものは，トロンテイによるデトロイトのマルクス発見とどこか似ている。ちょうどトロンテイが，マルクス主義のイデオロギーがヨーロッパで擁護されながらも，マルクスの『資本論』の正確な解釈には，アメリカの労働階級の歴史の方が事実上重要であったという根本的な乖離を看破したように，スミスの『国富論』の正確な解釈にとって，西洋が自由市場イデオロギーを擁護したことよりも，中華帝国の晩期の方が事実上の重要性を持っていたという根本的な乖離を，今やウォンとポラメンツが同じく看破したのである。トロンテイをもじっていえば，彼らは北京のアダム・スミスを見出したのだ[24]」。

上文の冒頭にある，トロンテイによる「デトロイトのマルクス」という文言は，マルクス主義哲学者のマリオ・トロンテイが刊行した『労働と資本』に拠るもので，トロン

23　ここでのウォンとポラメンツの指摘や主張は，ともにアリギの『北京のアダム・スミス』からの引用である。Giovanni Arrighi, *Adam Smith in Beijing,* 2007.［中山智香子監訳『北京のアダム・スミス－21世紀の諸系譜』2007年，作品社］（邦訳　44-6ページ）。

24　Arrighi，同書（邦訳　46ページ）。

テイはその 2 版のあとがきの一節に，「デトロイトのマルクス」というタイトルを付けた。

その著書のなかでトロンテイは，アメリカのデトロイトで起きた自動車労働組合による争議で，労働組合側が主張した労働関係の改善と賃上げ要求が経営者側に受け入れられ，労働組合が勝利した事実を取り上げた。トロンテイは，こうも書いているのだ。

> 「第 2 次世界大戦期までの少なくとも半世紀，マルクスはアメリカで闘争とその要求が引き起こした反応という現実に照らして読まれることができた。このことは，マルクスの著作によって，アメリカの労働闘争が解釈できるという意味ではない。むしろ，これらの闘争がわれわれに，マルクスのきわめて応用的な著作である『資本論』や『経済学批判要綱』の，正確な解釈への手がかりを与えることを意味するのである[25]」

トロンテイにしてみれば，ヨーロッパにおいてマルクス主義の影響が鼓舞されていた時代に，なんとヨーロッパではなくアメリカにおいて，それも，アメリカ国内の労働組合組織としては鉄鋼労働組合と並ぶ自動車労働組合が，GM やフォードを中軸とした自動車産業の資本家を屈服させたという事実は，ある意味では信じ難かったに相違ない。

アリギが自分の新著に「デトロイトのマルクス」をもじって，『北京のアダム・スミス』という書名を付けたのは，近年における中国の発展が，アダム・スミスの発想（ダイナミズム）に近いことを証明したかったからではなかろうか。次節では，アリギの『北京のアダム・スミス』に沿いながら，中国発展の歴史を振り返り，アリギの思想に迫りたいと思う。

2　中国発展のスミス的特徴

18 世紀を通して最も大きな国内市場は，ヨーロッパではなく中国に見出されたということを，アダム・スミスはよく知っていた。この市場は長い時間をかけて形成されたものであったが，18 世紀に見られた輪郭は，明朝と清朝初期の国家形成の活動にその起源を辿ることができる。

明・清帝国の五世紀間を日本の歴史に当て嵌めると，室町時代の足利義満からアメリカのペリー艦隊が浦賀に来航する直前の時期までになる。またヨーロッパの歴史でいえば，イギリスとフランスの間で前後百年間戦った百年戦争から，フランスでルイ・ナポレオンが登場するまでの時期である。

25　原著は，Mario Toronti, *Operai e Capitale,* 1971. ここではアリギの『北京のアダム・スミス』から引用した（邦訳　35 ページ）。

中国の明朝は，乞食僧から身を起こした朱元璋（しゅげんしょう）によって1368年に創建された。明朝は三百年近く続いたが，1644年に起きた清らによる反乱で滅ぼされた。続く清朝は北東アジアに住む民族が建てた王朝である。清朝の始祖は満州族のヌルハチで，日本人には馴染みが薄いが，アメリカ映画の「インディ・ジョーンズ」に出てくる，ヌルハチの遺骨をめぐる争奪戦で知られるようになった。ヌルハチからラスト・エンペラーの溥儀（ふぎ）まで12代続いたが，1911年の辛亥革命で清朝は三百年近い歴史を閉じた。[26]

明の前の王朝だった南宋では，中国の北のモンゴル人やツングース族との戦いによる多大な軍事出費と，シルクロードに対する支配権を失ったため，王朝は私的な海洋貿易を奨励した。また人口増加による水稲耕作の拡大で収入を増やすことができた。

しかし明朝になると，米穀生産地の南部地域と北部の政治的中心を結ぶ運河を修理し拡張して，市場経済と長江下流域の成長を促がした。こうして，南北国内交易が促進され，海上貿易よりも国内市場の拡張が優先されたのである。中国が，スミスが豊かさへの自然な径路の典型と捉えた方向に進んだのは，きわめて合理的なことだった。

しかし，市場基盤の発達，拡張という中国の伝統が，産業革命を達成した欧米諸国による侵略に曝され，とくにイギリスとのアヘン戦争に惨敗してからの百年間は，半植民地の道を辿らされ続けたのである。このことが中国社会に激しい衝撃を与えたが，逆にアヘン戦争は，中国にとって近代への起点として認識され，1949年の毛沢東による中華人民共和国の誕生に繋がった，ということができよう。

革命後の中国が漸進的な社会主義化政策を続け，現在のような世界の大国としての存在に成長したことは，周知の通りである。その改革におけるスミス的特徴について，アリギは漸進主義，社会的分業の拡大を目的とした国家活動，資本家利益の国益への従属，資本家間競争の活発な奨励，さらには教育の大幅な拡充などを挙げる。[27]

アリギはこれらに加えてもう一つのスミス的特徴，すなわち国内市場の形成と農村地域における生活条件の改善を重視している。なかでも，とくにアリギが注目したのが郷鎮企業の台頭である。これは，1970年代の終わりから1990年代半ばにかけて，中国の卓越した指導者だった鄧小平のもとで進められた事業であった。

中国政府は農村労働者に対して，「村を去ることなく，その土地を手放す」ことを奨励したが，その受け皿になったのが，農村の近郊都市に新たに台頭しつつあった集団指導の郷鎮企業である。郷鎮企業が増加した背景には二つの改革があった。その一つが，地方政府に財政上の剰余が生じた際には，これを特別手当に当てる自主性を認めたこと。また，もう一つの改革は，共産党幹部と政府高官が郷鎮企業に企業者的エネルギーを注いで運用できる権限を，地方政府に与えたことであった。

26　上田信『中国の歴史９・海と帝国－明・清時代』2021年，講談社，18-9ページ，548ページ。
27　Arrighi，前掲書『北京のアダム・スミス』（邦訳　500ページ）。

この改革によって，郷鎮企業は非労働活動に従事する農村労働者を，鄧小平に「まったく予想外だった」と言わせたほど多く吸収したのだ。アリギによれば，郷鎮企業の成功が中国経済の台頭に多面的に貢献したとして，次の 4 点を挙げている。[28]

第 1 点は，郷鎮企業は労働集約指向であったため，農村の余剰労働力を吸収し，都市部への移住を極端に増加させることなく，農村収入を増やすことができた。第 2 点は，郷鎮企業は比較的規制されなかったので，極端にいえば無数の市場に参入でき，それが全域にわたって競争的圧力を増大させて，あらゆる都市企業にも収益性の改善を迫る結果になった。

また第 3 点は，郷鎮企業は農村の主要な税収源になり，農民の財政的負担を軽減させた。税金は農民の不満の第一の原因であったため，郷鎮企業は結果的に社会の安定に貢献できたのである。更に最後の第 4 点，これが鍵となる最も重要な点であるが，郷鎮企業が利潤と地代に再投資することによって国内市場の規模を拡大し，投資や雇用創出，企業の新しい分野への進出条件を作り出したことである。

3　中国は資本主義か

筆者は，資本主義と市場経済(社会)は別々の概念で，両者を合わせて資本主義だとの考えには賛同できない。そこで今節では，資本主義だけを考える。これから議論したいのは，『資本主義だけ残った』というタイトルの著作を発表した，ブランコ・ミラノヴィッチの主張をテーマに，主として中国を対象にした内容の展開である。

ミラノヴィッチにいわせると，資本主義による世界支配は二つの異なるタイプの資本主義によって達成された。ひとつは二世紀にわたって欧米で徐々に発展してきた。ミラノヴィッチの表現によると，それはリベラル能力主義的資本主義，他の一つは国家が主導する政治的資本主義ないし権威主義的資本主義である。そして前者の代表格がアメリカ，後者では中国だという。[29]

ミラノヴィッチは，如何なる根拠に基づいてこのふたつの異なるタイプの資本主義を定義するのか。ミラノヴィッチはマルクスの説に則ると言い，資本主義とは生産の大半が民間の生産手段によって行われ，資本が法的に自由な労働を雇用し，調整が分散されたシステムだ，と主張している。もちろんこれは，資本主義の一般的な定義に則するものであり，リベラル能力主義的資本主義に関してはほとんど異存はない。しかし，政治的資本主義については，ミラノヴィッチも「中国は本当に資本主義なのか，と問われることがある」と明かすくらい，疑問が多い。

資本主義の条件を満たすには，上記のように次の 3 点が必要である。第 1 に，社会で

28　同書（邦訳　504 ページ）。
29　Milanovic，前掲書（邦訳　12 ページ）。

の生産の大半が民間所有の生産手段－資本, 土地を用いて行われていること。第 2 には，労働者の大半が賃金労働者であること－法律で土地に縛られず，また自己資本を用いて自営業としているわけではないこと。第 3 として，生産や価格設定についての決断の大半が，分散された形でなされていること－誰かが彼(ら)に事業を押し付けているわけではないこと。

ミラノヴィッチはこの三つのすべてにおいて，中国は資本主義に該当すると断言する。確かに数字や比率でみれば，民間が大半を占めてはいるが，問題なのは，中国では国家(共産党と政府)の発言力や干渉，決定権がきわめて強力だという現実である。

最近の動きでいうと(2022 年 5 月現在)，コロナ禍で事実上のロックダウン(都市封鎖)になった上海市では，陽性者と同じ棟に住んでいるという理由だけで，陰性者でも隔離施設送りになる措置も出た。しかし，上海市民に許されたゴールは，感染を抑え込み上海市民の勝利を皆で称え合う未来だけしかない。

中国では，人民が政治に関わる機会は殆んどない。国家は国の利害に基づく政策にしたがい，必要に応じて民間部門(主として大企業)を抑え込むことができる自律性を持っていると同時に，国益のために民間部門を統制する権限も有している。

もちろん，政治的資本主義国にも法律はある。しかし，法の支配を一般化するということは，政治的な関係や所属政党を問わず，万人に通用させるのは到底不可能なのだ。なんとなれば，受益者にとってその法律が都合悪く影響するかも知れないからである。また，国家が断乎たる方針や態度で事に臨む必要がある際に，法に縛られることなく，法による意思決定ではない行動が可能になるような制度－といえるかどうか－があった方が有益だからでもある。

しかしそのためには，高い能力を持つ優秀な高級行政官僚（テクノクラート）を必要とする。何故なら，法による支配を選択的に適用するには，テクノクラートによる恣意的運用が必要になるからで，そこから腐敗が発生することは避けられない。ミラノヴィッチも，腐敗は政治的資本主義に固有のもので，自由裁量による意思決定を必要とするいかなるシステムも，固有の腐敗を抱えざるをえないことを認めているのだ，と明言している。

しかし，それは資本主義全般についていえることで，縁故資本主義（crony capitalism）と呼ばれているものだ。縁故資本主義というのは，政治家や官僚との縁故（コネクション）が，物事を決定する際の重要な要素になっている資本主義を意味している。たとえば政治的なロビー活動，反競争的規制，途方もない高役員報酬，などがそれに当ろう。

現代では，銀行などの金融機関がとくに鮮明だといわれるが，もちろん，経済界全体に蔓延している現象である。実はそれが，アダム・スミスの時代から存在していたのは

事実のようで，極端なのは，「そもそも，こうした行為の元凶はアダム・スミスその人にある」とまで言い募る説もあるくらいだ。

最近（2022 年 2 月）に出版された『アダム・スミス　共感の経済学』で，著者のジェシー・ノーマンは次のように，縁故資本主義（現代の呼び方）がはびこったことに対して，それが何故政治や経済にとって有害かを総合的に分析した最初の学者がスミスであった，と主張している。

その過程でスミスが考察したのは，第 1 にレント・シーキング，つまり市場において売手が望む最低価格と市場価格との差，すなわち「濡れ手に粟の利潤」を求めることを追及した。第 2 に，市場参加者の間に存在する情報と市場支配力の非対象性，つまり企業家が価格を吊り上げる策略で政治家を騙すこと，更に第 3 点として，企業の株主から経営を委任された経営陣が，株主の利益に反して利益を先取りする行動に走ることをきびしく糾弾した。

アダム・スミスはこうした根拠を元に，縁故資本主義を攻撃しただけでなく，問題解決の基礎を築いたのである。これらの概念は，今日でも政治・経済分析の手がかりとなっている。[30]

それでは今節の締めくくりとして，中国は「政治的」という接頭語付きでも資本主義なのかどうかについて，筆者の私見を述べておきたい。すでに 2 で述べたように，中国は他のあらゆる大国に先駆けて国家を建設し，市場経済の基礎を築いた。とくに明・清帝国の六世紀足らずの間に，国家としての強大な力を付けたことが知られている。

いわばこの「早熟な」国家形成が，現在の中国に繋がっていることを直視すべきだと思う。もっとも資本家階級（ブルジョア）も，国家の保護を受けながら，隠然たる勢力を保ってきたといえよう。現在の中国は，共産党政権と資本家階級が政治的権力を「分配」している感が強い。しかしまだ圧倒的に国家の力が強く，何かにつけて深く干渉しているのが現状である。これでは到底資本主義国とはいえまい。

但しいつの日か，資本家階級が強い経済力を持つようになれば，資本主義といえる国家が誕生する可能性はあるに違いない。しかし中国がすでに民間企業を中心に，組織化された市場社会を形成していることは評価しなければなるまい。

V　資本主義と市場社会の行方

1　新しい資本主義とは

もともとアダム・スミスの時代には始まっていたイギリスの資本主義で－まだ資本主

30　Jesse Norman, Adam Smith—*What He Thought, and Why it Matters,* 2018.［村井章子訳『アダム・スミス　共感の経済学』2022 年，早川書房］（邦訳　332-6 ページ）。

義という用語は生れていなかったが－資本家が資本を投下して事業を起こしたのは，商業もしくは工業だった。それが21世紀まで続くが，近年になって工業の新資金需要が減少する一方，非工業企業に資本投入する傾向が強まってきた。たとえば金融業，投資業，或いは不動産業，情報産業(IT)などの非工業がそれに該当しよう。

そのため資本主義は，金融資本主義とかIT資本主義などと呼ばれるようになった。資本家が資本を投下するのは，そこから収益を得るためであるが，金融業やIT産業はともかく，不動産業や投資業はとかく企業リスクが大きいため，投資先としての適性があるのかどうかの疑問も起こるに違いない。それでは一体，これからの資本主義はどうなるのか。

最近になって，「新しい資本主義」とか「人の資本主義」といった言葉を聴く機会が多くなった。たとえば岸田文雄首相もさかんに「新しい資本主義」を持ち出すが，岸田は新しい資本主義において成長と分配の好循環を実現するうえで，フローとストックの両面で人への投資を伸ばす重要性を強調している。フロー面では賃上げが重要で，ストック面は学び直しなどへの投資を進めると主張する。もちろん，岸田の掲げる施策は多岐に亘るが，なかでも「人への資本主義」には拘っているように思える。

「人の資本主義」に関しては，稲盛経営哲学研究センターの人の資本主義研究プロジェクトのメンバーによる『人の資本主義』が，新しい資本主義の方向性やあり方についての示唆を与えてくれる。そこで，そのなかから任意に研究報告を選び出し，ここでその要約を紹介しておくことにする。

先ず，この著作の編者である中島隆博が構想する，「人の資本主義」から始めよう。中島は，人の資本主義とは人間と資本主義の複合語であり，人間という概念も資本主義という概念も，歴史の上で大きく変遷してきた。ひとりの人間が根底から変容することに人間のチャンスがあり，それが人間の価値といえるのではないか。このように，変容する人間に価値を置くことに新しい資本主義が貢献できればのぞましい，と主張する。

また中島は－これが最重要のポイントであると思われるが－Human Co-Becomingという新語も使っている。これは，日本に古くからある仁の概念の読み直しであり，「一緒に」という意味のCOという言葉を付けて，人間はひとりで人間的になることはできない，他人と一緒にいるということで始めて人間的になる，という意味を持たせているのである。

それでは，資本主義の方はどうなるのか。資本主義も大きく変化を続けてきた。先ずモノの生産を基礎にしてモノの資本主義が生れた。スミスやマルクスの時代がそうであった。しかし生産されたモノが市場を通して流通し続け，それに消費が追い付かなくなった現在，資本主義はモノからコトに方向を転じたのである。

但しコトはモノと違い，同じ商品を大量に生産し流通させるというわけにはいかな

い。出来事や情報は他との違いを見せなければ売れない。そこでコトの資本主義は，違いを作り出しユニークさを売り物にすることに熱中した。しかしそれにも限界がある。それでは，これからの資本主義はどこへ向かえばよいのだろうか。その答えを中島の言葉で聞くことにしよう。

「わたしは，それが人の資本主義だと考えています。その場合の人は生産者，労働者，消費者，個性ある個人といった近代的な概念には収まりません。それは遥か昔の仁や今日的な Human Co-Becoming が同時に告げている人なのです。そうした人が花咲くことを価値とすること，もし資本主義がそちらに向かうことができるのであれば，世界の風景は大きく変わるだろうと思います[31]」。

人の資本主義の定義や方向性については，中島のわかりやすい解説を聞いたので，続いて筆者の判断で選んだ三人の研究報告を紹介することにしよう。初めに山下範久の報告から聞くことにする。

山下のとっかかりは，フェルナン・ブローデルの資本主義論である。ブローデルは資本主義を反－市場的な力と位置付ける。その理由はこうである。資本家は他との競争に勝つために，差異を利用するか媒介をするに違いない。しかし市場経済は等価交換のシステムであるため，それを市場に持ち込んで，差異を見つけるか，創出するかしなければなるまい。ブローデルが資本主義の特徴を反－市場的な力とした根拠はここにある。資本家あるいは資本主義をこのように定義すれば，あらゆるところで資本家を見つけることができようから，資本主義をシステムと呼ぶべきかどうか曖昧になるであろう。

さて，資本主義という概念には二つの側面がある，と山下は言う。そのひとつは批判的なもの，もうひとつは科学的なものである。まず批判的というのは，資本主義という言葉を使うことで，私たちが克服しなければならないことを具体化する考え方である。

それに対して科学的とは，資本主義に関する議論の初期段階では，資本主義は科学的概念であると主張されていた。マルクスはその代表的論者であった。ところが冷戦終結後になって，資本主義という概念は批判的鋭さを失い，市場経済と同義語になったのである。このあとでも取り上げるが，経済学者の多くが資本主義イコール市場経済と考えるようになったのはたしかである。経済史の分析のために資本主義という概念を使う必要がなくなったからだと山下は説明している。

次いで山下は，資本なき資本主義（capitalism without capital）を紹介している。これは，ジョナサン・ハスケルとスティアン・ウエストレイクの著書の表題であるが，山下は更に，ライアン・エイヴェントの社会資本という新しい概念にも関心を示しているようだ。

古典的資本主義では，資本は有形であると想定して，きわめて古典的なモノの捉え方

31　中島隆博編『人の資本主義』2021 年，東京大学出版会，Ⅶページ。

をしていた。資本とは工場や機械を意味している。ところが社会資本の時代では，資産はネットワークの中にあって，架空の商品もフィクションとして所有することができる。そこで，古典的な資本主義の資本の意味は消え，ますます多くの人がこのフィクションを拡大したり，ネットワークの中の資産として見做すようになった。これは，産業革命にも匹敵する第四の革命といえるだろう。このプロセスの中で人間中心主義は弱体化し続ける，という説である。

「人の資本主義」で人間，人間性，更には人類という概念を定義するなら，それに付随してエイジェンシー，責任，ウェルフェアといった概念も，自由，平等，友愛という近代の主要原理を大まかに引き継ぐことになるのだろう，というのが山下の結論であった。

ところで，『人の資本主義』の各人の研究報告のあとには，かならずメンバーの討論も掲載されているのが特徴であるが，筆者はこの山下の研究報告のあとの討論に興味を惹かれた。それは，資本主義と市場経済の区別というテーマをめぐっての安田洋祐の質問内容だった。山下は既述したように，資本主義と市場経済は一体との考えだと思われるが，安田の質問というか持論というか，その内容が筆者が日頃主張している考えに近く，しかも斬新であったからである。

安田は，『サピエンス史』の著者であるハラリによれば，資本主義は資本家が利益を獲得すれば，その利益を生産プロセスに再投資すべきである。資本家は再生産のために利益を使わなければならないという点で，それは一種のイデオロギーである，と紹介した。これはたんなるシステムに関する概念ではなくて，やらなければならないものだ。この定義を採用するとすれば，現在の経済制度はイデオロギーなのか，それともたんなるシステムなのか。

ハラリは，経済的な富裕を富（ウエルス）と資本（キャピタル）の二つに区別している。富は利益であるが生産には使われず，たんに貯めておくだけのもの。それに対して資本は生産や再生産に役立てられる利益である。要するに，市場経済と資本主義を区別するかぎは，再投資というイデオロギーなのだ，という安田の発言を筆者は「我が意を得たり」とほくそ笑んで読むことができた。[32]

次に紹介するのは堂目卓生の研究報告である。堂目は冒頭で，日本の社会やグローバル社会が直面している諸課題を乗り越えて，持続可能な共生を実現するために，どのような社会を目指すべきか，私たちは何をなすべきか，このような問題意識を持って資本主義を考えていきたい，と抱負を述べている。

堂目は18世紀以降のイギリス経済学が専門で，なかでもアダム・スミスの研究で有名だが，スミスを含めてジョン・スチュアート・ミル，アマルティア・センの3人の学

32　同書，89-99, 112-3ページ。

者は，それぞれの立場からあるべき社会の姿をどう捉えるかを研究してきた。この 3 人には共通点がある，と堂目は言う。

スミスは『道徳感情論』で，道徳を根源にした共感に基づくフェアな競争を通じて，豊かさを追及する社会をつくるべきだと主張した。とくに競争に参加できない最下層の労働者に，より多くの雇用がもたらされ，それによって最低限の所得が得られることを願っていた。最大多数の最大幸福がそれであり，堂目はそれを共生資本主義と呼ぶ。

スミスの 73 年後に『経済学原理』を発表したミルは，あるべき競争社会についてはスミスの考えを引き継いだが，スミスとの違いは機会均等化を強調したこと，つまりすべての人が競争に参加できる機会を目指すことだった。ミルは，スミスが最大多数の最大幸福を求めたのに対して，一人ひとりが質の高い幸福を実現する機会を均等化させ，それを折り込んだ上での最大多数の最大幸福を政策として打ち出すべきだ，と主張したのである。

たとえば，労働者が自分たちで資本や土地を所有し，経営することも必要だと言う。どういう時に成功し，どうなると失敗するのかを経験することなど－実際には実現困難な障がいも多いが，人びとの機会を広げるべきだとも強調している。

3 人目のアマルティア・センも，スミスやミルの思想を受け継いではいるが，センは更に一歩進めて，機会の均等化だけではなく，より不利な状況下にある人により多くの資源を回していくべきだ，との意見である。それを実現できるように，社会として手を差し伸べていく必要があるとも主張しているのだ。

これはヒューマン・デベロップメント（人間開発）と呼ばれ，その国がどの程度人間開発に努力しているかを示す指標として，国連に採用され毎年発表されている，センが開発した指標である。ミルとくらべると，センは結果の平等化にまで踏み込んでいるといえよう。

堂目は上記 3 人の主張を図解で説明したあと，自身が経験した知的障がいを持つ人たちのコミュニケーション「ラルシュかなの家」での生活体験から，共生社会の必要性を強調する。堂目によると，「かなの家」を支える考え方は，知的障がいを持たない人が，持つ人を一方的に助けるというものではなく，障がいを持たない人が持つ人とともに生活し，彼ら彼女らの心の傷や友情の求めに向き合い心も開くことによって，自分自身の心の壁を取り払うべきであるというものだと言う。

堂目が紹介した 3 人の学者の主張を図に描けば，真ん中は丈夫な人たちであり，外にいる人たちはかわいそうな人たちである。ところが「かなの家」はそうではなく，誰もが弱者に始まり弱者に終るから，これを図にすれば，弱者を社会の真ん中に置いて，その周りを強い人とか優れているとされている人たちが取り囲んで，向き合っている。それが本当の共生社会である。「こうした共生をどうやって実現し，物質的にも持続可能

なものにしていくのか，そのことを考えてみよう」というのが堂目の締めくくりの言葉である。[33]

続いて広井良典の研究報告に入ろう。広井の専攻のひとつが科学史とあって，彼の見解は一味違う。約 20 万年前にホモ・サピエンスが地球に登場した時代まで戻って考察するというから，そのスパンの長さに先ず恐れ入った。この時以降の狩猟採集段階が第 1 のサイクルで，そのあと定常化した。

第 2 のサイクルは，約 1 万年前から人口が増えて農耕が始まり，以後拡大・成長期を経て再び定常化した。この時期は，一般的に中世といわれている。それからの 300～400 年間が 3 番目のサイクルの拡大，成長期で，近代つまり工業化社会の時期に当たる。その順序でいうなら，今は第 3 の定常期ということになろう。

農耕文明の後半－紀元前 5 世紀前後－には，地球上の各地で同時多発的に新しい普遍的な思想が生れている。たとえばインドの仏教，中国の儒教や老荘思想，ギリシャ哲学，中東のユダヤ教やイスラム教的旧約思想などがそれである。

われわれが生きている今は，第 3 の拡大・成長サイクルが定常期に移行する時期である，と広井は主張する。ジョン・スチュアート・ミルが『経済学原理』(1849 年)のなかで，やがて人間の世界は成長を終え定常状態に達するが，人間はむしろ定常に達した社会で真の豊かさや幸福を得るという，ポジティブなイメージを提起した。資本主義もこの段階で成熟段階に入り，正面から定常経済をどう考えるべきかの局面になった，と強調している。

資本主義の起源説には，12～3 世紀，15～6 世紀，そして 18 世紀という諸説があるが，広井は，1600 年に成立したイギリスの東インド会社の頃から資本主義が勃興した，との説を採っているように思われる。

1601 年にはイギリスで，貧困に陥った人に生活保護の目的で事後的にお金を配る救貧法が生れ，その後 19 世紀の終りになって，ドイツでは事前にお金を積み立ててリスクに備える社会保険が誕生した。ところが，1929 年に起きた世界恐慌で失業者が続出するのを知り，ケインズが資本主義の救世主のように雇用創出策を提言したのである。

こうした流れのなかで特徴的なのは，事後的な介入から次第に前倒しの介入へと進化してきていることである。つまり資本主義は，自らのなかにある程度社会主義的な要素を組み込みながら進化してきた，ということができよう。

しかし 21 世紀に入り，さまざまな難問が出てきて，格差はますます広がり低成長も続いているなかで，資本主義と社会主義の対立が緩和されるとともに，エコロジーもそれとクロスするような社会の出現がのぞましくなってきている。そこで浮かび上がってきたのが，持続可能な福祉社会である，と広井は強調する。

33　同書，203-4 ページ。

それでは，目指すべき「持続可能な福祉社会」の具体的な姿というのは，どのようなものなのか。それはサスティナブル，つまり環境が持続可能になったといっても，それですべての問題が解決するわけではない。したがって，分配の公正－ここでは福祉のこと－との二者を統合したコンセプトが必要だ。そのような社会が定常型であるというのが広井の主張である。

個人の生活保障や分配の公正が実現されつつ，それが資源・環境の制約とも両立しながら，長期にわたって存続できるような社会，まずはローカルレベルの経済循環から出発して，ナショナル，グローバルへと積み上がっていく。それが資本主義と社会主義とエコロジーの融合であるともいえる。

広井は，21 世紀後半に向けて世界は高齢化が高度に進み，人口と資源，消費も均衡するような，ある定常点に向かいつつある。また，そうでなければ持続的ではない，との持論に自信を持っているようだ。「ホモ・サピエンスがアフリカで 20 万年前に生れて世界に広がっていき，資本主義がイギリス周辺で始まって世界に行き渡り，最後にアフリカがこのような状況になって，全体が定常状態に達する，こんな姿が浮かび上がってきます」で締め括った[34]。広井らしい広大なスケールである。

2　市場社会の現実と課題

ここからは資本主義から離れ，もっぱらアダム・スミスが発見した市場社会（商業社会）の現代・未来を検討することにしたい。幸いなことに，前章の 3 で縁故資本主義の説明に登場した『アダム・スミス　共感の経済学』の著者であるジェシー・ノーマンが，その著書の第 8 章「アダム・スミスと市場」で取り上げているからでもある[35]。

そこでの内容を中心に，①市場の働き（機能），②消費財・サービス市場と資産市場との違い，③国家と市場の関係，についてスミスの思想と現代および未来を対比させながら検討していきたい。

①市場の働き（機能）－アダム・スミスの市場論のポイントは歴史的な発展を踏まえた点にある，とノーマンは指摘するが，その歴史を現代にまで伸ばして，スミスの視点で現代の合法的な市場の働きを議論の対象にしよう。

その第 1 は，ノーマンが「市場のパラドクス」と呼ぶものであるが，これはなかなかデリケートなテーマだ。というのは，人が直接市場に関わるのは，一日にせいぜい一時間か二時間程度であろうが，我われが生活を営む上で必要なもののほとんどは市場を経由している。ところが，市場では価値が評価されない介護や育児など，あるいは市場を介さないボランティア活動や社交などは，経済的に重要であるにも拘わらず切り捨てら

34　同書，261-5 ページ。
35　Norman，前掲書（邦訳　293-311 ページ）。

れている。これがノーマンのいう「市場のパラドクス」である。

第２は，現代社会においては，規則や外部のルールとは無縁で完全に自由な市場はほとんど存在しないことである。たとえば，特許や著作権などの知的財産権が法的に保護されていたり，市場では合法的に売り買いできないが，販売が免許制になっているものも意外に多いことに気付く－法的な保護は市場にとって重大な侵害であるにも拘らず，である。「それが，我われの時代でも現実だった」というスミスの声が聴こえる。

第３に重要なのは，市場は絶えず変化することである。スミスの時代にも市場の変化は起こっていたし，スミスもそのことを十分に承知していた。スミスは市場を固定的あるいは静的なものとは見ず，絶えず新しく生れる動的なものとして認識していた。そのスミスも，現代のような技術の進歩・変化に基づく市場の変化を見れば驚くであろうか。いや，恐らく敏感に順応するに違いない。

更に第４点は，市場はアニマルスピリッツによって動かされるということだ。市場は無菌状態でもなければ中立でもない。市場参加者の心理状態とは切っても切れない関係にある，といってよかろう。スミスもこうした人間の心理や行動を熟知していたし，人の心理の揺らぎは現代においても変わらない。市場は人間社会のなかに埋め込まれているのだ。

②消費財・サービス市場と資産市場との違い－次に，市場のなかでも消費財やサービスの市場と較べると，資産市場はとくに価格の不安定性が目立つことを議論しておく必要があるだろう。消費財とサービスの市場は，ノーマンの指摘の通り市場参加者がさまざまな情報にアクセスできるし，個人の判断や選択を集団としての意見に統合できる市場メカニズムが存在する，などの条件が満たされているので，透明でウィンウィンの市場である，といってよかろう。

それに対して資産市場は，とくに価格の決定と予想の点で市場のロジックメカニズムは消費財・サービス市場とは大違いである。いかにも曲者だ。たとえば株式市場では，ケインズの「美人投票説」のように，個々の株式の投資価値を予測するよりも，市場参加者の最多数の「予想を予想」して売買する方が当たりやすい。ケインズも投資家だったから，投資家心理を熟知していたのであろう。

また株式市場に限らず，原油や穀物などの先物市場では，現金で取引するのではなく，一定期間後に清算するシステムであるため，そこには投機心理や思惑により価格の動きが不安定になることが，むしろ市場の常識になっている。外国為替相場だってそうだ。

為替相場といえば，アダム・スミスは結構この分野でもくわしい知識を持っていた。それにはスコットランドのエア銀行の倒産事件が絡んでいる。この話をここでくわしくする余裕はないが，当時のスコットランドの銀行に共通していたのは構造的な資本不足

で，預金量に乏しく開設後間もないエア銀行は為替手形の割引などで息をつないでいた。

ところが，スコットランド銀行が世界で初めて導入した当座勘定（キャッシュ・アカウント）を使って，地元の農家向けに融資を増やし，急速に事業を拡大したのである。しかし不運なことに，1771 年にスコットランドを襲った不況で，膨れ上がったエア銀行の債権が焦げつき，あっという間にエア銀行は倒産してしまった。

エア銀行の多額出資者だった大地主のバクルー公爵も大きな痛手を蒙った。このバクルー公爵に従いてフランス遊学した経験のあるスミスは，公爵のために出資金の事後処理にも携わったが，当座貸付などに関する知識が『国富論』（第 2 編第 2 章）にくわしく述べられているのをみると，スミスはかなり突っ込んだ勉強をしたものと思われる。

スミスもあの当時を思い出したように，「バクルー公爵の難儀を救うために忙殺されて，『国富論』の原稿完成が遅れたわけではない。健康も害してしまったのだから」と弁明していたそうである。スミスは心優しい人柄の人である。

③国家と市場－国家と市場社会とは，法に基づく正統性という点で，切っても切れない関係にある。市場は，適切に施行される賢明な法律によって保障されなければならない。そのための国家は強い権限を持つが，それは控え目であるべきだ。そうでなければ，市場参加者が自由に能力を発揮することができないからである。

スミスは，重箱の隅を突っつくような規則や，補助金による悪しき影響を懸念したが，その一方で，国家が市場規制者としての役割を果たすべきことも忘れてはいない。現代の市場社会においても，世代間の所得再配分の実行や，宇宙からサイバー空間に至るまったく新しい市場に対する法規制の確立など，国家に求められる機能は多い。もちろん企業に限らず，企業や社会的ニーズ，それに国際関係が複雑化するにつれて，国家が取り組むべき課題はますます増えるだけでなく，むずかしい課題に対処していかなければなるまい。

その点におけるスミスの立ち位置は，市場社会は信用と信頼によって成り立つもので，外部の制度とりわけ法と政府とにその存在価値を依存している，というものであった。スミスの著作のなかでは，かなり広範囲にわたり政府の介入を認めるべきだとの主張が述べられているのは確かで，これらの法規定を政府がどこまで取り入れたかまでは不明だとしても，スミスの著作のなかでは相当の数になるはずだ。その意味では，スミスは自由放任者でも，政府嫌いでもなかったのである。

ノーマンによれば，「近代国家には市場を破壊する力もあるが，注意深く介入すれば市場機能を高めることもできる（中略）。市場社会そのものも，今後待ち受けるさまざまな課題に加え，自由主義と個人主義を土台にしつつ，相手を尊重する自由な議論と人的交流が活発に行われる空間を維持する，という難問に取り組まなければならない」と

強調している[36]。

3 「見えざる手」の謎を解く

本論文ではここまで，アダム・スミスといえば「見えざる手」というくらい有名な言葉について触れてはこなかった。もっとも，「見えざる手」という言葉は，スミスの著作を通じて一書に一回，合計三回しか出てこないし，定義もはっきりしない。なんとなく漠然とした言葉であることは確かだ。その三回とは『天文学史』，『道徳感情論』，『国富論』である。その謎をここで解いておこう。

一回目の『天文学史』は道徳哲学や政治経済学とは異なる分野なので，ここでは取り上げないが，「ジュピターの見えざる手」という言葉が使われている。ジュピター（ユピテル）とはローマの最高神のことなので，ここから「神の見えざる手（invisible hand of God）」の誤解に繋がったのであろう。

続いては，『国富論』に出てくる「見えざる手」である。ここでは，市場の機能を支えているのは市場参加者の利己心，自己愛だとする，スミスお得意のバージョンで，資本家が労働者を雇用して利益を上げようとする場合，資本家には公共の利益を推進しようとする意図はまったくない。しかし「見えざる手」に導かれて，自分の意図にはなかった社会に利益をもたらすことになる。

このような文脈のなかで「見えざる手」が出てくるのだが，何故そうなるのか，どのようにしてそれが実現するのか，といった説明は一切ない。『国富論』ではこの個所以外に「見えざる手」は現れないため，読者にはわかったようで曖昧な感覚が残るに違いない。

では，『道徳感情論』では，どのような場面に「見えざる手」が現れるのかというと，広大な土地を所有する富者が，その土地で収穫された生活必需品（たとえば小麦）のなかから家族の生活に必要な量を除いても，大部分が残ることになる。しかし地主は，自分たちの幸せな生活を実現するために，小麦を売って豪華な奢侈品を購入する。小麦はそれらの品を売った人たちの手に入る。

地主は奢侈品を買う一方，奢侈品を作って地主に売った人たちは，小麦という生活必需品を得たという不平等が発生するが，生活必需品は平等に分配されることで，地主は意図せずに社会に貢献することができた。富の増加は人びとに幸福をもたらすから，結局は地主の利己心と貪欲によって幸福が人びとの間に平等に分配される。この仕組みをスミスは「見えざる手」と呼んだのである。これなら『国富論』よりわかりやすいのではあるまいか。

ここからは，アダム・スミス研究者の堂目卓生の主張も援用しよう。上記の例に出て

36　同書，（邦訳　405ページ）。

くる強欲の地主は，より多くの奢侈品を手にすることで，より幸福になろうとする。しかし，地主の野心は幻想であり欺瞞でしかないが，このような「弱い人」によって経済が発展し貧困が減少して，社会は繁栄するという。

スミスによれば，人間のなかには「賢明さ」と「弱さ」の両方があり，「賢明さ」には社会の秩序をもたらす役割が，また「弱さ」には社会の繁栄をもたらす役割が与えられている。とくに「弱さ」は一見，「悪徳」であるが，このような「弱さ」も「見えざる手」に導かれて，繁栄という目的の実現に貢献する。しかし，「見えざる手」が十分に機能するためには，「弱さ」を放任するのではなく，「賢明さ」によって制御される必要がある。これがスミスの基本的な立場であった。

「弱さ＝悪徳」と考えるのが，Ｉで紹介したマンデヴィルである。マンデヴィルは『蜂の寓話』で，社会の繁栄はもっぱら悪徳のおかげによるものだ，との皮肉な見方を示した。一例を挙げると，「人間に生れつき備わっている優しい性質や温情も，彼が理性や自己制御によって獲得できる点の美徳も，社会の基礎ではなくて，道徳的にせよ自然的にせよ，いわゆる世の中で悪と呼ばれるものこそ，我われを動物にしてくれる大原則であり，例外なくすべての商売や職業の堅固な土台，生命，支柱である」といったところだ。

スミスは，マンデヴィルの思想や論理を全面的に受け入れはしなかったものの，『蜂の寓話』の副題になっている「私人の悪徳は公共の利益」は，スミスの思想と共生していたと考えるべきであろう。またスミスは，「弱さ」とは反対の徳についても，慎慮，警戒，細心，節制，恒常性，不動性といった諸徳にも，「見えざる手」に導かれることにより，慈善のみによっては成し遂げられない社会の繁栄が実現されるという[37]。

いずれにしても，堂目の「見えざる手」に関する議論は，「見えざる手」が出てくる場面にとどまらず，何ヵ所も違った方面から検討しているところがユニークである。ここで筆者の「見えざる手」への短評－市場社会の秩序に対する人びとの道徳的信頼の指標。政治経済学専門書の『国富論』より以前の『道徳感情論』で，スミスが「見えざる手」を披露したのはそのためだったと思う。

4　終節－再び，アダム・スミスの夕食を作ったのは誰か？

著者のマルサルはその第 1 章の最後で，次のように言っている。「女性の仕事はその他もろもろ。男性が仕事をするために，誰かがやらなければならない何か。―誰のおかげで飯が食えると思ってるんだ？アダム・スミスが答えを見つけたのは，経済の半分でしかない。彼が食事にありつけたのは，商売人が利益を求めて取引したためだけではない。アダム・スミスが食事にありつけたのは，母親が毎日せっせと彼のために食事を用

37　堂目，前掲書　104-6 ページ。

意していたからだ[38]」

かなりきびしい叱責に聴こえる発言であるが，早速マルサルに食いついたノーマンは，経済学であれ何であれ，女性が除外され地位が歴史的に低かった理由を考察した点で，それなりの価値があると評価はしたものの，自著でアダム・スミスに批判的な論者には，容赦なく反論しているのと同じ調子の攻め方で，マルサルを逆批判している。

経済学者が女性を無視したり軽視してきたことを批判するマルサルに対して，ノーマンは真向から「それをアダム・スミスと結びつけるはまったく救いようがなく，何の検討もしていない好い加減な見方だと言わざるを得ない。マルサルの指摘は完全に事実に反する」といった調子である[39]。

たしかにスミスは，著作のなかで女性を政治経済と絡めて議論することはほとんどなかった。なかでも，女性を含めて人びとの私的な生活や家庭内での仕事は無価値とみて，取り上げようともしなかったのは事実である。しかしマルサルの筆鋒はアダム・スミスだけに焦点を当てて，男性を攻撃したのではない。たまたま書名がエキセントリックだったため，人びとの関心を集めたのであって，内容それ自体はジェンダーギャップについての妥当な主張だと筆者には思える。

アダム・スミスが筆者に声を掛けてきた。見れば，スミスは手に小鍋を抱えている。それは何かと聞くと，母親の夕食にスープを作ったと答えた。「わたしにもスープくらいは作れますよ」と笑顔になって，そのまま消えて見えなくなった。恐らくスミスのスープは『国富論』の味がしたであろう。

38　Marçal，前掲書（邦訳　28 ページ）。
39　Norman，前掲書（邦訳　274 ページ）。